

総力戦とアメリカの対応

デニス・シュオルター

アメリカ人の太平洋戦争に対する支配的な解釈は、次のようなものである。すなわち、この戦争は人種的な動機づけにより、人種的に遂行されたものである。議論のポイントはジョン・ダワー（John Dower）の『容赦なき戦争』（*War without Mercy*¹）に集約される。その論拠は広島と長崎での徹底した再調査と日本人の抑留によって裏付けられており、グーグル（Google）へのアクセスが本論文執筆時で 100 万件近くに上っている。それは象徴的な従軍記者アーニー・パイル（Ernie Pyle）の次のような同時代的言明によって今も支えられていることがわかる。

私が（太平洋に）到着してまもなく、日本人捕虜の一団を見た。（中略）彼らは、普通の人のようにレスリングをしたり、笑ったり、会話をしたりしていた。それにもかかわらず私は不快感を覚えた。彼らを見た後、精神の浄化が必要だった²。

おそらくより不安定で感情移入が激しい 21 世紀において、テレンス・マリック（Terence Malick）は異なる観点から映画「シン・レッド・ライン」を撮影しており、その中間あたりで日本兵の捕虜の一団を登場させている。その外見と挙動は、まるで猿のようである。

アメリカ人による人間の「戦利品」の獲得については、太平洋艦隊司令長官チェスター・ニミッツ（Chester Nimitz）提督が早くも 1942 年 9 月に、「敵の身体の部分には記念品として持ち帰ってはならない」と命令している。この命令はほとんど効果がなかった。そのことは有名な『ライフ』誌（1944 年 5 月 22 日号）の写真で証明されている。若く美しいアメリカ人女性が日本人の頭蓋骨を自慢げに掲げている写真である。この頭蓋骨は太平洋にいる彼女の恋人から送られたものであった³。

このような文脈では、挑戦的な慣習は挑発的もしくは邪悪なものとして排除される。それにもかかわらず、本論文は別の説を提唱する。それは、日本と戦争するにあたってアメリカ人の態度を規定していたのは、「共通の戦争文化」であったということである。

¹ John W. Dower, *War Without Mercy: Race and Power in the Pacific War* (New York: Pantheon, 1986).

² Ernie Pyle, *Last Chapter* (New York: Henry Holt, 1946), p. 5.

³ 一般に James J. Weingartner, “Trophies of War: American Troops and the Mutilation of Japanese War Dead, 1941-1945,” *Pacific Historical Review*, 61 (1992), pp. 53-67 を参照。

このパラダイムは、真珠湾攻撃以降も変わらなかっただけではない。アメリカ人の「異文化間戦争」に対する態度は、たとえ明確な人種差別主義的要素を伴っていたとしても、太平洋戦争を戦った状況の産物であるとするのが正解である。標準的な歴史の文献で指摘されているような、根深く敵意に満ちた人種差別主義を持ち出すのとは対照的な解釈である⁴。

具体的に考察すると、戦間期の軍隊は、太平洋で起きる可能性のあった戦争に対して組織的な計画を立てていなかった。日本との戦争の不確実性の焦点は、そのほとんどすべてが、戦略的に無防備であったフィリピンによって示された特殊かつ防御的な作戦上の問題に置かれた⁵。1930年代におけるアメリカ海兵隊の、植民地歩兵部隊から水陸両用戦特殊部隊への再編成は、1941年12月の時点でもまだ続けられていた。装備は貧弱で、組織は混乱しており、海兵隊は日本と戦う具体的なドクトリンを持っていなかった。精神的にも物質的にも精鋭なショック・フォースの概念は、アメリカ陸軍との関係においてのみ受け入れられているものであった。日本の文化や日本軍の戦闘序列との比較も、その過程においては理解されなかった。「アメリカの侍」としての海兵隊の概念は、戦争中、遡及的に構築されたものであった⁶。

次に海軍についてである。世紀の変わり目にアメリカが最初に太平洋へ進出して以降、日本との将来の紛争の第一義的な責任は海軍にあることは明白であった。同様に海軍のドクトリン、作戦計画、建艦方針は、日本の主力艦隊との決戦がグアムと沖縄の中間海域で行われるというマハン（Mahan）の仮定に基づいていた。その仮定は、1941年12月7日まで有効であった⁷。

太平洋艦隊が「貧乏人の戦争」を戦ったその後の数ヶ月間、その中心的な要素は「共通の文化」の一部にとどまった。海軍が空母中心の戦闘に転換したことは、戦艦の喪失を意味した。しかし、10年以上にわたってドクトリンと方法が研究され、実践された⁸。

⁴ この類型論と表現法は Hew Strachan, “A General Typology of Transcultural Wars—The Modern Ages,” in *Transcultural Wars From the Middle Ages to the 21st Century*, ed. Hans-Hennig Kortum (Berlin: Akademie Verlag, 2006), pp. 85-103 による。

⁵ Harold R. Winton, “The Interwar Army and the Rising Sun,” presented at the 2010 meeting of the Society for Military History. Brian Linn, *Guardians of Empire: The U.S. Army and the Pacific, 1902-1941* (Chapel Hills: University of North Carolina Press, 1997)を参照。

⁶ David G. Ulbrich, *Preparing for Victory: Thomas Holcomb and the Making of the Modern Marine Corps, 1936-1943* (Annapolis: Naval Institute Press, 2011)は、最良かつ最新の戦前の海兵隊についての分析である。Keith B. Bickel, “MARS Learning: The Marine Corps Development of Small Wars Doctrine, 1915-1940” Ph D Dissertation, Johns Hopkins, 1998 は、真珠湾のほぼ前夜まで継続した海兵隊のそうしたアプローチの一貫性を論じている。

⁷ Edward S. Miller, *War Plan Orange: The U.S. Strategy to Defeat Japan, 1897-1945* (Annapolis: Naval Academy Press, 1992).

⁸ Charles Mellhorn, *Two-Block Fox: The Rise of the Aircraft Carrier, 1911-1929* (Annapolis:

戦闘機パイロットは、12月と1月に多くの生命を犠牲にした戦術を改善し、次いで放棄し始め、ガダルカナルの戦いまでに艦上戦闘機ワイルドキャットのパイロットは、零戦に対して確実に戦えるようになっていた⁹。1941年12月8日に発令された無制限潜水艦戦は、第一次世界大戦でドイツが始めたものであったが、以降、アメリカ海軍は実行可能な作戦方針であると考えていた¹⁰。

南太平洋におけるアメリカ軍の航空部隊と地上部隊の増強は、当初、オーストラリアやニュージーランドといった同盟国が有する懸念に対応するものであった。両国が展開可能な人員数は、世界中でイギリスのために戦うには不十分であった。ニューギニアやソロモン諸島における日本軍の不断の増強から、オーストラリアは侵攻されるのではないかという恐れを一段と強く感じた。日本陸海軍の最高司令部がそうした野望に満ちた計画を熟考することはなかった。日本軍の南方への進撃は、基本的にはアメリカ国民の力と精神を打ち砕く強固な態勢を構築し、交渉を有利に進めるためであった¹¹。日本の戦略は、限定的な目的のための総力戦とすることができよう。

ついでに言うと、この戦略は軽率であるが、不合理ではなく、勝利を追求する「共通の戦争文化」から導かれたものであり、具体的な日本の軍事的、文化的経験から得られたものではなかった¹²。しかし、その可能性への懸念があったため、1943年末まではヨーロッパよりも太平洋にアメリカの部隊が数多く派遣されていた。特にアメリカの人的資源の余裕が失われていくことが懸念されるようになると、ただ守備隊や維持戦力として無活動状態に置いておくにはあまりにも数が多すぎた。船舶の慢性的な不足により、アメリカへ移動させることもできなかった。使用は必然的であった。

アメリカ海軍が総反撃の承認を得たことは、太平洋戦争が「異文化間」対立へ進展する上で以前から存在していた人種差別主義よりもはるかに重要であった。「ドイツ第一主義」の戦略からの大幅な逸脱により、すでに進行中の大規模な建艦計画が最適に利用さ

Naval Institute Press, 1974); Thomas Wildenberg, *All the Factors of Victory: Admiral Joseph Mason Reeves and the Origins of Carrier Air Power* (Washington, D.C.: Brassey's, 2003).

⁹ John B. Lundstrom, *The First Team: Pacific Naval Air Combat from Pearl Harbor to Midway* (Annapolis: Naval Institute Press, 1984).

¹⁰ Joel Ira Holwhitt, *Execute against Japan: The US Decision to Conduct Unrestricted Submarine Warfare* (College Station: Texas A& M Press, 2009).

¹¹ あらましは、Richard B. Frank, *Guadalcanal: The Definitive Account of the Landmark Battle* (New York: Random House, 1990), pp. 1-45を参照。詳細は、John B. Lundstrom, *The First South Pacific Campaign: Pacific Fleet Strategy December 1941-June 1942* (Annapolis: Naval Institute Press, 1974); H.P. Willmott, *The Barrier and the Javelin: Japanese and Allied Pacific Strategies, February to June 1942* (Annapolis: Naval Institute Press, 1983)を参照。

¹² Edward G. Drea, *Japan's Imperial Army: Its Rise and Fall, 1853-1945* (Lawrence: University Press of Kansas, 2009), pp. 225-227.

れるようになった。この計画では、新造艦は太平洋での作戦のために設計されていた。それはアメリカ海軍の役割が支配的となる戦域を求めた効果的なロビー活動の表れであった。また、それはヨーロッパ戦域へはアメリカ陸軍とその航空部隊、そして、イギリス海軍に次いで三番手と遅れをとることとは対照的であった。

そこには標準的な軍種間の対立以上のものがあった。当時、主要な軍事強国の中で、アメリカと日本だけが陸軍と海軍が基本的に対等であった。その対等さは、未だ基本的にそれほど重要でない反日感情よりもアメリカの文化的原動力にとってはるかに有意で、しかも、はるかに深く根ざしていた。フランクリン・ルーズベルト (Franklin Roosevelt) の戦争指導者としての主要な責任の一つは、陸軍と海軍のどちらかを突出させないことであった。陸海軍につまらない喧嘩をさせるのではなく、同じ戦争を戦わせることであった。太平洋での軍事行動は、人種的な問題ではなく、主として制度的な問題への戦略的対応であった¹³。

ミッドウェイ海戦後、そして、ガダルカナル周辺における接近戦の攻防の間、中部太平洋での海軍の中盤戦での行動は、あまりマハンのとは言えない。1944年秋、フィリピン沖で神風特別攻撃隊が登場するまで、海軍の日本人に対する率直な理解は、「共通の文化」によって形作られたままであった。彼らは熟練の技術を持ち、危険であるが、異質の敵というよりも普通の的であった¹⁴。

海兵隊については、ウェーク島は当初、圧倒的に不利な英雄的抵抗という伝統的な見方をされていた¹⁵。よく議論されることであるが、第一海兵師団は、文化的使命とイデオロギー的闘争の文脈において、ガダルカナルに上陸したとされている¹⁶。しかし、ガダルカナルとタラワの両島からの最も直接的な評価においては、軍事行動開始時に海兵隊に効果を発揮させるものとして、新兵訓練所の噂や酒場でのゴシップよりも、個人的

¹³ Grace Person Hayes, *The History of the Joint Chiefs of Staff in World War II, Vol. II, The War against Japan* (Annapolis: Naval Institute Press, 1982)は、詳細かつバランスのとれた内容である。Thomas B. Buell, *Master of Seapower: A Biography of Fleet Admiral Ernest J. King* (Boston: Little, Brown, 1980)も参照。

¹⁴ James D. Hornfischer, *Neptune's Inferno: The US Navy at Guadalcanal* (New York: Bantam, 2011)は、戦争半ばにソロモン諸島で実施された海軍の卒業演習について生き生きと描写している。Jeff Reardon, "Breaking the U.S. Navy's 'Gun Club' Mentality in the South Pacific," *The Journal of Military History*, 75 (2011), pp. 533-564 は、戦術とドクトリンを焦点にしている。もちろん、直接の戦闘の経験が陸上部隊の経験や銃後のプロパガンダの間接的な影響を排除しなかった。

¹⁵ J. Gregory Urwin, *Facing Fearful Odds: The Siege of Wake Island* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1997).

¹⁶ Craig M. Cameron, *America's Samurai: Myth and Imagination in the Conduct of Battle in the First Marine Division, 1941-1951* (New York: Cambridge University Press, 1994).

な訓練、柔軟性、団結心が強調されている¹⁷。

太平洋におけるアメリカの反攻に参加した陸軍師団は、主として 1940 年に動員された戦前のハワイ守備隊と州兵から編成されていた。彼らは戦場に投入される前に、有効かつ秩序だった民族的反日教育を受けていなかった。ハロルド・ウィントン (Harold Winton) は、ウェストポイント陸軍士官学校出身の将校たちはフィリピンで死んだ級友や同僚のために、「復讐」を決意していたのではないかと示唆している¹⁸。レブンワース陸軍指揮幕僚学校では、1942 年 10 月に一度だけ行われた「ジャップ」戦闘員に関する一般講義で人種戦争への最初の言及が付け加えられた¹⁹。その年の末まで、フィリピンにおける捕虜たちの運命について信頼できる情報は得られなかった。パターン死の行進は、1944 年 1 月まで一般に知られることはなかった。

総じて、国策は類似のパターンを反映していた。日本人の抑留でさえ、単に人種に基づいた決定ではなかった。ポール・トムセン (Paul Thomsen) の関連情報源の詳細な検証によれば、よく抑留の立役者として糾弾される西部防衛司令官ジョン・L・ドウィット (John L. DeWitt) 中将は、西海岸の日本人の強制収容に精力的に反対した。戦略的状况、日本の能力と意図に関する誤解された情報報告と誤認にもかかわらず、国家安全保障上の懸念と比較して、ルーズベルト政権の最終決定においても、人種はほとんど役割を果たしていなかった。結局、定期刊行物の細かな検証によって、報道機関が報じる人種差別の例が実際に起きた頻度は、かつて信じられていたよりもはるかに少なく、戦時における外国人嫌悪への批判としてしばしば否定的に引用されていたことが明らかになった²⁰。

トムセンは、アメリカ現代史のこの痛ましい章の裏にある主たる原動力が、情報不足、意思決定の拙さ、そして、愚行の陳腐かげんであると結論づけている。アメリカ人の目から見て、当初、日本人はほとんど二級の敵であったと主張する彼の議論をすべて受け入れる必要はない。太平洋のまったくもって広大な環境——見渡すかぎり無限の広さを持つ空、海、陸地は、「バスに乗って丸一日、旅をしても二つの州しか横断できない」文化の息子や娘にさえ恐れを抱かせた。文明の不存在、特に集落の不存在は、距離と同様に不安をかき立てた。ほとんどどこにも、人間の命令で相殺される感情的保証は見当た

¹⁷ ウルブリッチは学問、論争、議論を生み出し続ける問題に関する最新の出发点である。Gordon Rottman, *U.S. Marine Corps Pacific Theater of Operations 1941-1943* (Oxford: Osprey, 2004) は、戦術と組織に詳しく、極めて有用である。

¹⁸ ウィントンの所感 (2011 年 8 月 30 日)。

¹⁹ Lt. Col. Warren Chase, "Close-Up of the Jap Fighting Man," CARL Archives. これは 1942 年 10 月に行われた講義の記録である。ウィントン教授に参照を勧められた。

²⁰ 2011 年 9 月 6 日にポール・トムセンが要約した調査結果の概略。私の同僚が近く発表する論文で本文献を重要視しており、それを共用させてもらったことに対し、格段の謝意を表す。

らなかった。遭遇する環境には人間の接近を拒否する珊瑚岩、火山灰、ジャングル、丘陵、山岳のある島々もあった。湿度と熱は生命力を奪い、衰弱性の疾患に追い打ちを掛けた。サメから蚊に至る動物によって、苦痛と倦怠は増した。

治療法や苦痛緩和剤さえ問題と同一視されるようになった。一例として熱帯地方の害悪であるマラリアは、抗マラリア薬であるアタブリンで効果的に治療することができた。これはキニーネの代用品である。アタブリンが滅菌作用を持つことはすぐに実質的信仰となった。エロール・フリン (Errol Flynn) のような男らしさの象徴による否定はほとんど効果がなく、アタブリンを服用しないことは規律違反となった。

アメリカ人たちはなじみのない太平洋の環境を彼ら自身の極西部地方と考えて処理した。風景と人間を支配し、改造することによって開拓地を手なづけたのである。よく知られたジョークに、オーストラリア人と日本人はともにジャングルで戦うことに長けていたが、アメリカ人はジャングルを消してしまったというものがある。メラネシアで活性化した積荷崇拜は神々が空と海から富を持ってくるというものであったが、それははっきりした理由もなく現れ、物質を完全に異なるものにしてしまっただけで消える異邦人の包括的な文化的衝撃を描写、例示している²¹。

後方作戦地域では、意味のあるものは孤立と単調さだけであった。前線のアメリカ人は総じて異質で敵意のある生態系だけでなく、そこで快適にくつろいで過ごしているかのように見える敵意のある日本人の存在に直面した。外見はひどく欺瞞的であった。日本軍は訓練され、組織化され、装備を有していた。しかし、満州でソ連と戦うことを想定したものであったため、不適切であった²²。直近の戦争経験は中国平原でのものであった。太平洋の環境は日本人にとっても欧米人と同じように異質であった。脆弱な補給線の末端における苦しみは、その補給線が空と海の作戦によって、急激に増大していった。ココダ道は高知県から来た兵士にとってもニューサウスウェールズから来た兵士に劣らず、「無限の苦しみの道」となり、生き残った者ははるかに少なかった²³。

ジャングルの超人という日本人兵士のイメージは伝説となった。南アジアにおける1941年12月以降半年間の初期の「遠心攻勢」(centrifugal offensive)を無計画に行っ

²¹ Peter Schrijvers, *The GI War against Japan. American Soldiers in Asia and the Pacific in World War II* (New York: New York University Press, 2002). 特に pp. 101-134 はこの戦争の物的側面を調査している。詳細は Eric Bergerud, *Touched with Fire: The Land War in the South Pacific* (New York: Penguin, 1996) を参照。積荷崇拜については優れた論文集である *Cargo, Cult, and Culture Critique*, ed. H. Jebens (New York, 2004) を参照のこと。

²² 特に Alvin Coox, *Nomonhan: Japan against Russia*, 2 vols. (Stanford: Stanford University Press, 1985) を参照。

²³ 最新の英語文献である Craig Collie and Haiime Marutani, *The Path of Infinite Sorrow: The Japanese on the Kokoda Track* (Crows Nest, NSW: Allen & Unwin, 2009) を参照。

た結果である。マラヤ、フィリピン、ビルマ、そして、オランダ領東インドでは、日本の陸上部隊は連戦連勝であった。これは予測されていなかったことであり、空前の出来事であった。さらに重要なことに、勝利は信じられないほど易々と得られたのであった。戦後の調査で、日本の成功は効果的な個人および小隊の訓練、速度、奇襲、攻撃性を強調する戦術教義、半ば自動車化された陸軍のジャングルでの作戦にはからずとも適合した軽装備が合わさった結果であることが判明した。中隊、小隊に至るまで命令系統のあらゆるレベルにおいて、日本の将校は指導力と柔軟性を発揮した²⁴。

こうした属性はいずれも極秘ではなかった。西洋諸国、特にアメリカの駐在武官や観戦武官は数年来、数十年来、そうした点を指摘してきた。ただし、ジャングルでの戦闘行為は想定外で、組織的な興味や、ましてや反応を喚起するような形での指摘でもなかった。結果は知的、感情的な簡略化した表現のプロセスであった。日本の戦闘における勝利は軍事上の属性よりも人種的なものに起因するとされた²⁵。神話は神話によって反撃されやすい。「ジャップ」は深く考えることができなかった。なぜなら、彼らの戦闘行為は極めて非合理的であったからである。あらゆるレベルで何としてでも日本人には勝利しなければならなかった。

環境や想像の面でのアメリカ人の精神性に及ぼす影響は太平洋地域での地上作戦の本質により増幅された。日本の攻撃は連隊規模より大きいことはめったになかった。1944年7月から8月にかけてのニューギニアのアイタペでの戦闘は例外中の例外であった²⁶。ガダルカナル以降、アメリカは攻勢にあった。そこで日本人は「最初の」占領者であり、防衛者であった。逆説的に、主として「共通の戦争文化」の二次的要素がほぼ世界共通である「生まれながらの」ジャングル戦士という日本人の比喩を生み出すことになった。この結論は本質的に日本人の陣地構築技術や偽装の技術に基づいていた。いずれも想像し得る限り、戦争を遂行する面で「共有」され、「西洋的なもの」であった。日本の戦術教義は異常なまでに攻勢重視であったかもしれない。しかし、工兵は最高であった。日本軍兵士は属性の如何を問わず、重労働に慣れていた。南太平洋のジャングルや中部太平洋の珊瑚礁の島々で、日本の指揮官は野営と戦術を環境に適応させた。アメリカの火力に押されて、水際防衛から不都合な地形の島の内部へ移動して守備にあたった。しか

²⁴ Maj. C. Patrick Howard, "Behind the Myth of the Jungle Superman: A Tactical Examination of the Japanese Army's Centrifugal Offensive, 7 December 1941 to 20 May 1942," MA Thesis, USACGSC, Ft. Leavenworth, 2000.

²⁵ Greg Kennedy, "Anglo-American Strategic Relations and Intelligence Assessments of Japanese Air Power, 1934-1941," *The Journal of Military History*, 74 (2010), pp. 737-773 は、同じ事例を別の尺度から検討している。

²⁶ Edward J. Drea, "Defending the Driniumor: Covering Operations in New Guinea, 1944," Leavenworth Papers NR. 9 (Ft. Leavenworth: USACGSC, 1984)を参照。

し、迅速な反撃にとってマイナスであった地形は、徐々に、そして体系的に複雑な防衛網に組み込まれていった。その防衛網は前進する敵を開けた土地に誘導するように計画されていた。火力統制は完璧で、狙撃は致命的なものであった。歩兵部隊の高度に有機的な火力は、短射程では幾度となく破壊力を示し、また、予想もしない方向から襲ってくるのであった。掩蔽壕は深く掘られ、低い位置を保ち、掩蓋を施されており、激しい砲火を避けるのに十分であった。特に組織力を失い、苦勞して勝ち得た局所的な成功により興奮状態に陥った敵軍に対する反撃のための発射点として、有利な位置が選択されていた²⁷。

要するに、太平洋での日本人は手強い敵であった。彼らの陣地は奪取することができ、彼らの守備は破ることができたが、死ぬ覚悟のできた敵と接近戦を交えるという代償を払わなければならなかった。

例えば、ペリリューでは、当初、アメリカ軍が上陸した浜辺での戦車と歩兵の強襲による瞬く間の敗北から復活した守備隊にとって、短期間で終わるはずであった戦闘は、島の丘陵や洞窟での2ヶ月に及ぶ悪夢となった²⁸。

ガダルカナルおよびタラワにおける最初の大規模な地上戦は、アメリカ人が外国で外国人と対決する感覚を強化したにすぎなかった。おそらく、その触媒として作用したのは、ガダルカナルの不運なゴッジ偵察隊であった。それは情報将校が怪しげな情報に基づいて降伏交渉を無分別に試みたことに始まり、戦争の本格的作戦における偵察隊の全滅で終わった。それは白旗の誤用と伝えられるものを含む日本の裏切り行為の話として広まった²⁹。

文字通りほとんど一日中続く日本の死を賭した攻撃で特徴づけられるヘンダーソン飛行場を巡る厳しいシーソーゲームは、ニューギニアでのブナ・ゴナの戦いにおける塹壕から塹壕へと繰り広げられた戦闘が山場であった³⁰。他の状況では、攻撃と防御における日本軍のどう猛性と有効性、降伏の絶対的な拒否は尊敬の念を生じさせたかもしれない。その代わり、戦闘における日本人の行為について、赤十字の腕章の意図的な無視、捕虜の無差別殺害、果ては食人などの点が段々と記述されるようになる。そうした出来

²⁷ 英語で書かれた概説書で最良のものは、Gordon Rottman, *Japanese Pacific Island Defenses 1941-1945* (Oxford: Osprey, 2003)である。

²⁸ Harry Gailey, *Peleliu 1944* (Annapolis: Nautical & Aviation Press, 1983)は、戦術面から見た好書である。

²⁹ Frank, pp. 129-131 および Bergerud, pp. 408-410 は、同偵察隊の編成から、その運命を概観している。

³⁰ 後者の戦闘はアメリカの文献では無視されることが多いが、Peter Brune, *A Bastard of a Place: The Australians in Papua* (Crowns Nest NSW: Allen & Unwin, 2003)は、同戦闘を如実に描写し、状況を説明している。

事の中において真実、噂、でっち上げを区別する線を常に維持するのは困難であるが、記述された戦闘地域における日本人の行為はあまりに残酷で、真実の核心を広く周知させるに十分であり、その過程を無視して「戦争の墮落」の一部として片付けることはできない³¹。

アメリカ人が日本人の「異質性」を確信するために必要な、よりいっそう根本的な要素は、個人および集団の自決の容認であった。太平洋戦争における日本の戦争指導は原則として自殺的ではないことは強調されるべきである。将校は失敗した攻撃を中止することができたし、実際に中止した。また、退却を命じることもできた。状況に応じて、より高位の司令部は守備隊を撤退させることに長けていた。エスペランサ岬とニュージョージア島での戦いがその確たる例である。ブナ・ゴナの戦いにおけるような最後の抵抗は、それなりに論理的な軍事目的に適っており、敵の前進を遅らせ、その犠牲を増加させた³²。

最後の抵抗は戦争文化において一般的な要素である。多くの場合、それにつきまとうものは、死ぬまで戦えという命令である。同じようにありがちなものは、現場の兵士による訓戒の修正である³³。第二次世界大戦の間、日本兵のみが組織的かつ文字どおりにこれを採用している。しかし、自決はアメリカ人にとって異質なものの以外の何物でもなかった。徳川時代には、敵味方が条件面で折り合いをつけられれば、降伏が認められていた。また、自決は失態や敗北を償うために侍階級に受け入れられた対応であった。明治維新期に、軍隊は「不名誉よりは死を」という概念を一般に普及し、制度化していった。両大戦間において、兵士たちはいかなる状況においても最後の兵まで戦うように教え込まれた。日本は1929年のジュネーブ条約に、考え方が異なるという理由で、調印していない³⁴。

人類学や社会歴史学では、恥の文化と名誉の文化が論じられている。一般にアメリカ、特にその軍隊は最善を尽くし、決してあきらめないという「対処する文化」が特色であ

³¹ Yuki Tanaka, *Hidden Horrors: Japanese War Crimes in World War II* (Boulder, Co.: Westview Press, 1996)の調査を参照。食人には、個人およびグループ間の結束を深めるための儀式として人肉を食べることも含まれた。Chester Hearn, *Sorties Into Hell: The Hidden War on Chichi Jima* (Praeger, 2003)を参照。

³² Bergerud, p. 416.

³³ 例えば、レオナード・スミスは「最後の兵まで戦う」という表現は公式報告書的美辞麗句であって、実際には十分、交渉が可能であったという彼の発見を中心に重要な研究を行っている。Leonard V. Smith, *Between Mutiny and Obedience: The Case of the Fifth French Infantry Division during World War I* (Princeton: Princeton University Press, 1994).

³⁴ Drea, *Imperial Army*, pp. 17-18, 158 は、この題目についての従来の立場をまとめている。しかし、Naoko Shimazu, "The Myth of the 'Patriotic Soldier': Japanese Attitudes towards Death in the Russo-Japanese War," *War & Society*, 19 (1992), pp. 69-89 も参照。

る。対処する文化は二度目のチャンスを提供する。恥と名誉の文化ではチャンスは一度しかない。対処する文化は人生においてやり直しの機会を与えるが、恥と名誉の文化は死しか与えない。対面する文化は直感的に自殺を卑怯なものとするか、究極的にそれを非人間的なものとして否定する。特にユダヤ・キリスト教は自殺をきつく戒めており、そのことは第二次世界大戦に従軍した大部分の将兵に根本的な影響を及ぼした³⁵。

ガダルカナルの攻防の最後のテナル川の戦いでさえ、日本人が自決したのであれば、違和感や文化の教化力への驚き以上にはならなかったろう。敗北が現実になると、区域あるいは崩壊した島における組織的な抵抗として、日本兵は傷つき、病に襲われ、飢え、退却または救助の望みもなく、助けも得られない中で、アメリカ兵を殺し続けた。こうした自己犠牲による遅延は最小限にとどまった。彼らが強い犠牲は日本人の生命の犠牲と引き合うものではなかった³⁶。作戦の最終段階になると、ビラや拡声器を使った呼び掛けによって、捕虜の数は増えていくのがふつうであった。敗残兵が降伏したり、捕らえられたりすることもよくあった。ほぼ絶望的な負傷兵が手榴弾の効果範囲にいたアメリカ兵を道連れに自爆出来なかったり、入院患者が小銃を手にしても照準を合わせられないほど衰弱していれば、捕虜の合計人数はもっと多かったかもしれない³⁷。

太平洋の先験的にひどく嫌われた厳しい環境は、個人化と人間化を招いた。日本人の行為によって体系的にそうしたプロセスが可能になった。結果は、「他人」と解される敵と異質な世界で「過酷な戦い」を行う精神構造であった。

ニューギニアに展開したオーストラリア人は敵の大した抵抗に遭わなかったが、それなりに彼らの本来の敵の性質について考えていたようである³⁸。アメリカ人はそうではなかった。衛生兵と看護兵の中の平和主義者たちは腕章を捨て、武器を取った。歯と頭

³⁵ 背景については、Georges Minois, *History of Suicide: Voluntary Death in Western Culture* (Baltimore: Johns Hopkins Press, 1999); Maurice Pinguet, *Voluntary Death in Japan* (Cambridge: Polity Press, 1993); Emiko Ohnuki-Tierney, *Kamikaze, Cherry Blossoms, and Nationalisms: The Militarization of Aesthetics in Japanese History* (Chicago: University of Chicago Press, 2002)を参照。より具体的な比較としては、Stephen Morillo, "Culture of Death: Warrior Suicides in Europe and Japan," *The Medieval History Journal*, 2 (2001), pp. 242-257がある。Maxwell Taylor Kennedy, *Danger's Hour: The Story of the USS Bunker Hill and the Kamikaze Pilot who Crippled Her* (New York: Simon & Schuster, 2008)は、戦闘員個々の生と死に対する姿勢に関する優れたケース・スタディである。

³⁶ Bergerud, pp. 131-133, 416 は、この議論を発展させている。

³⁷ Allison B. Gilmore, *You Can't Fight Tanks with Bayonets: Psychological Warfare against the Japanese Army in the Southwest Pacific* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1998)を全般的に参照。

³⁸ 一般にこの論点については、Judith A. Bennett, *Natives and Exotics: World War II and Environment in the Southern Pacific* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2009)が参考になる。

蓋骨は生きた捕虜たちよりもありふれたものだった。アメリカ軍のある師団は、知的目的から捕虜を求め、褒美としてビール 1 ケースまたはウィスキー 1 本を提供した。三日間の休暇とアイスクリームを有効な褒美としていたとの報告もある。そうしたボーナスにもかかわらず、沖縄での 2 ヶ月にわたる戦闘の後、アメリカ軍 4 個師団が捕らえた捕虜は 100 人にも満たなかった³⁹。

1942 年から 44 年までの間に恐怖と欲求不満によって助長された憎悪の合理的な総括を行うための作戦を詳細に説明する必要はない。憎しみは道具や行動に次々と変化した。イデオロギッシュなドイツ国防軍のスラブ人やユダヤ人への対応と並んで、日本人の非人間化についてよく記述されていることは、非人間化を意味のある接触が不可能な外国人と戦う感覚と考えるとよりよく理解できる。

1945 年までにアメリカ陸軍と海兵隊は害虫を駆除する際の精神構造で戦場に近づいた。工業国に特徴的な兵器であった高性能爆薬で効果が見られないと、アメリカ人たちはより古い原始的な火に回帰した。地上での火炎放射器、空からのナパーム弾は間違いなく作戦上の理由と同様に心理的な影響があつて、戦争の最後の年に戦局を決定する兵器となった。沖縄では、日本軍兵士がナパーム弾を浴び、曳光弾で焼かれた。「我々は他人が燃焼するという信じられないような恐ろしい光景を見て喝采した」と海兵隊のある中隊長は回想している。「なぜなら、我々は非人間的なものに還元されていたからだ⁴⁰。」

そうした戦術的精神構造は戦略的フラストレーションの増加を反映していた。レイテ沖海戦後、アメリカ海軍は日本を間接的に攻撃するような形になった。日本海軍に残されたものは基本的にはその基地のみとなった。輸送船団は事実上、消滅していた。標的となる艦艇は極めて少なかったため、アメリカの潜水艦は浮上して、平底船や漁船を砲撃で駆逐するようになった。海軍の作戦立案者たちは潜水艦による封鎖と砲空爆を調整して行う直接的な消耗戦略を提唱していた。しかし、極端な物資の不足に直面しても、日本が継戦を断念するという確証はなかった⁴¹。

戦前でさえ、エア・パワーの熱狂的な支持者は日本の本土防衛は空から直接、攻撃され得ると仮定していた。その目的のための理想的な手段と思われた兵器 B29 が就役した当初、中国国民党政府の破滅的な敗北が続いた。なぜなら、日本軍は、依然として蒋介石

³⁹ Clayton D. Laurie, "The Ultimate Dilemma of Psychological Warfare in the Pacific: Enemies Who Don't Surrender and GIs Who Don't Take Prisoners," *War & Society*, 14 (1996), pp. 99-120; Schrijvers, pp. 207-225.

⁴⁰ George Feifer, *Tennozan: The Battle of Okinawa and the Atomic Bomb* (New York: Ticknor & Fields, 1992), p. 353 に引用されている。

⁴¹ H. P. Willmott, *The Last Century of Sea Power, Vol. II: From Washington to Tokyo, 1923-1945* (Bloomington: Indiana University Press, 2010), pp. 473-525 は、海軍による封鎖の最終段階を分析している。

石の支配下にあった脆弱な基地と価値のある領土の大部分を蹂躪したからである。航空発進基地が新たに制圧したマリアナに移された際、結果は取るに足らないものとどまっていた。1945年3月、陸軍航空部隊は精密爆撃から比較的低い高度からの焼夷弾による基地周辺地域爆撃に攻撃方法を変更した。日本の都市は次々と炎上し、人々は命を落とした。夏までに攻撃目標の設定はほとんどいい加減になり、防備の乏しい都市も含まれた。富山はその面積の99.5%を破壊された⁴²。

日本はチムール以降空前の規模で産業力を失い、近代社会としての性格を失っていった。アメリカはその空軍力によってあらゆる都市を破壊し、全国民を餓死させる能力を有していたことは明らかであった。終戦時には、本土に生息するウグイスさえ食べられていた。それでも日本人は戦いを続けた。

こうして、歩兵にすべてが任されることになった。そして彼らの経験と予想もまた残酷なものであった。この時まで、アメリカ人はほとんどジャングルと珊瑚礁を見捨てていた。しかし、戦争の女神は皮肉な女神であった。ダグラス・マッカーサー (Douglas MacArthur) は1944年10月にフィリピンに戻るという約束を果たした。3ヶ月後、彼はルソン島を攻撃した。それとほぼ同時に、フィリピン南部へ前進して実施した統合作戦は実に見事で、その地域ではもはや掃討作戦程度のことしかやることはなかった。しかし、ルソン島は依然として近道がないことを証明した。

アメリカ陸軍は太平洋戦争の初期から急速に学習したことを示した。それは単に効果的なジャングル戦闘師団を生み出しただけでなく、いわゆるジャングル・機械化編成を生み出した。それは機械的可動性および装甲攻撃性と道路網から離れた場所で活動する能力を結合したもので、フィリピン、特にルソン島に展開して、その真価を発揮した。しかし、防備に悩まされたビルマにおいてウィリアム・スリム (William Slim) が大々的な突破口を開いたような機会は訪れなかった。軍団や軍の規模にエスカレートした地上作戦としてさえも、日本人は戦闘の間も、陣地の強化に多くの時間を費やすことができ、大規模な銃剣突撃や特攻攻撃に頼らなくても勝利することを重んじられた。アメリカ軍は1個師団だけで4週間で3000人の死傷者を出し、6000人以上が疾病または戦闘によるストレスで後退した。スターリングラードに匹敵する数週間にわたった接近戦によるマニラ攻略の結果、同市は廃墟と化し、10万人のフィリピン人が死んだ⁴³。

⁴² この問題に関する研究は多いが、その中でも Barrett Tillman, *Whirlwind: The Air War against Japan, 1942-1945* (New York: Simon & Schuster, 2010)は、包括的に理解する上で有用な端緒となる。背景については、Robert Wolk, *Cataclysm: General Hap Arnold and the Defeat of Japan* (Denton: University of North Texas Press, 2010)を参照。

⁴³ フィリピンにおけるレイテ戦後の地上戦はほとんど無視されている。最良の文献は、公刊戦史の Robert Ross Smith, *Triumph in the Philippines* (Washington D.C.: Center of Military History, US Army, 1963)である。James S. Powell, *Learning Under Fire: The 112th Cavalry*

ルソン島と似た状況の硫黄島は海軍のショーであり、中部太平洋での文字通り大規模かつ血みどろの島嶼作戦であった。日本側の地下陣地は、掩蔽壕と拠点をつないだ 10 マイル以上におよぶトンネルから成っていたが、アメリカ軍が上陸した時は未完成であった。1 ヶ月で 1 万 8000 人の守備隊がアメリカ軍に 6 万人以上の死傷者をもたらした。捕虜はわずか 200 人であった。硫黄島に投入された 3 個海兵師団は二度と戦うことはなかった。70 年後も残る疑問は、節約された爆撃機搭乗員は海兵隊の死者約 7 万人に見合ったのかどうかである⁴⁴。

沖縄は言わずと知れた最後のステップであるが、日本の島嶼防衛戦術の近日点でもあった。もはや人の命を無謀に犠牲にする余裕はなかった。日本人犠牲者はそれぞれ、共通の目的を果たさなければならなかった。アメリカ人のモラルを破壊し、彼らの機械が、決めた覚悟によって倍加された闘争心の前には役に立たないことを示すことであった。数千もの掩蔽壕、兵器ピット、戦闘陣地はトンネル網と地下壕の巧妙なネットワークに支えられていた。沖縄戦は日本版ハイテク戦争となった。

結果として、戦闘のストレスは人間が持ちこたえることのできる限界に近づいた。上陸開始時には 1100 人であった海兵隊の一個大隊は、戦闘終了時までには大隊規模を超えて 3000 人以上に膨れ上がっていた。身体と感情の崩壊率は、ヨーロッパやそれ以前の太平洋での作戦で経験したことがないほど高かった。耐久期間は数ヶ月から数週間に短縮し、最悪の戦闘では数日になることも珍しくなかった。彼らはアメリカ軍の交替要員の中から動員した役立たずの連中ではなく、身体屈強で、十分に訓練され、戦意旺盛な若者であった⁴⁵。

沖合いの海軍は神風攻撃に細心の注意を払っていた。神風特別攻撃隊は上陸を支援する任務で、ある地点に停泊していた艦隊に攻撃を加えた。「カミカゼ」は 30 隻あまりを沈め、その 3 倍の数の艦艇に危害を加えた。戦争全体を通じての海軍の損害の 5 分の 1 近い約 1 万人の水兵が死傷した。船に乗り組んでいる各個人を攻撃するような反復攻撃を撃退する艦船乗組員は、日本人パイロットが死を何とも思わず、整然と喜び勇んで自らを犠牲にするということを知って、衝撃を覚え、腰を抜かした。防御方法は最終的に改善され、神風 10 機のうち 9 機までを撃墜できるようになった。犠牲が 10 分の 1

Regiment in World War II (College Station: Texas A & M University Press, 2010), pp. 135-167 は、戦術レベルにおいて簡便にして優れている。

⁴⁴ Robert S. Burrell, *The Ghosts of Iwo Jima* (College Station: Texas A & M University Press, 2010)は、作戦の視点からアメリカに長く確固として存在する硫黄島神話全般に真っ向から挑戦している。

⁴⁵ 沖縄に関する大量の文献の中では、ファイファーの『天王山』(*Tennozan*) が、人間の次元での描写において際立っている。

になったことは、ささやかな慰みであった⁴⁶。

アメリカの計画がこれまでになくおぼろげながら大きく見えてきても、それは展望としてそれほど励みにはならなかった。それ自体、「共通の戦争文化」が日本の洗練された防御戦術に大いに寄与した皮肉な例であり、日本への大規模進攻にとって不吉であった。情報資料は、日本はほとんど正しく、最初の上陸地が九州であると予測していると正確に報告していた。結果的に、陸軍力の増強は当初のアメリカの予測の4倍であり、航空機は3倍であった。

上陸の成功は第一段階にすぎなかった。マニラはその解放過程で破壊された。都市化されている日本で何が起こるであろうか。アメリカ人の犠牲者の予測規模は依然として議論の的であった。より意味のある指標は、予測のもとに製造されたパープルハート戦傷者勲章の数である。それは約50万個であった。朝鮮戦争とベトナム戦争を経て、10万個以上が半世紀近くも在庫として残った⁴⁷。

確かに、九州の住民たちが前線で防衛に直接、動員されるとしても、それほど驚くに値しないのは確かであり、適当とも言えた。サイパンと沖縄では多数の住民がの自決し、鍛えられた前線の兵士でさえ極めて当惑した。アメリカ人たちが生き残りを賭して自ら女性や子供たちを組織的に射殺したら、どうなるであろうか⁴⁸。

政策は軍隊をジレンマから救う手立てにはならなかった。真珠湾攻撃以前からアメリカは日本の軍と外務省の暗号を完全に読むことができていた。1945年の半ばを過ぎても、それらは交渉への関心を示してはいなかった。示されていたのは、戦前の状態に戻すというレベルに関しての条件へのかすかな言及であった。——それはアメリカにとって外交的にも政治的にも受け入れがたいものであった⁴⁹。

事実上、アメリカの反応は日本の戦後復興を強調するための大戦略の慎重な調整であ

⁴⁶ Robert Cecil Stern, *Fire from the Sky: Surviving the Kamikaze Threat* (Annapolis: Naval Institute Press, 2010); Robin L. Rieelly, *Kamikaze Attacks: A Complete History of Japanese Suicide Strikes on American Ships, by Aircraft and Other Means* (Jefferson, N.C.: McFarland, 2010)を参照。

⁴⁷ Richard B. Frank, *Downfall: The End of the Imperial Japanese Empire* (New York: Random House, 1999)が、最も包括的に説明している。D.M. Giangreco, *Hell to Pay: Operation Downfall and the Invasion of Japan, 1945-1947* (Annapolis: Naval Institute Press, 2009)は、軍事的側面が秀逸である。Steven J. Zaloga, *Defense of Japan 1945* (Oxford: Osprey, 2010)は、技術や戦術に関して詳細である。

⁴⁸ この問題については特に Matthew Hughes, “War Without Mercy? American Armed Forces and the Deaths of Civilians during the Battle for Saipan,” *The Journal of Military History*, 75 (2011), pp. 93-133 を参照。

⁴⁹ Douglas MacEachin, *The Final Months of the War with Japan: Signals Intelligence, US Planning, and the A-Bomb Decision* (Washington D.D.: Center for the Study of Intelligence, 1998)は、入門書として有用である。

り、社会としてのその殲滅を意図するものではなかった。そうした移行の伝達が不十分であったか、誤解されたか、拒否されたかについても、長年の議論的である⁵⁰。しかし、ヨーロッパでの戦争が終わり、ソ連とアメリカの軋轢が増し、さらに、平和と復員を求める国内からの圧力が増すと、最少公分母である核の主導権を握る動きが促進された。

本論文の文脈において、軍関係者の間では、原爆は「単なる新しい兵器」と考えられていたことを強調しなければならない。戦後に表明されたその使用にまつわる疑念は、おおむね戦後に生じたものであった。日本本土への進攻が必要であったとすれば、アメリカの作戦計画には日本の要塞と防御に対して、毒ガスと神経ガスの使用が含まれ、核兵器使用の可能性も確たるものであったろう⁵¹。これは皆が無頓着で無知であったことを反映していた。ビキニ環礁での核実験では、水兵が半袖のシャツ一枚で標的の遺棄船上で核廃棄物をシャベルですくっていたことから分かる。また、それは軍事目的に対する「過酷な戦争」の極端でおそらくは究極の示威の反映であった。それは少なくとも1942年以降、アメリカが従事してきた戦争であった。

アメリカはまさに太平洋において激戦であった異文化間戦争を遂行した。しかし、その戦争のルーツは共通の戦争文化にあった。その本質は構造的というよりもむしろ状況的なものであった。そして、そのポイントはほぼ間違いなく最終段階によって最もよく表される。日本占領時のアメリカ軍人の戦後の振る舞いは、征服の結果であり、その継続ではなかった⁵²。社会的ゆがみとは異なる性質の犯罪行為はほとんどの復員兵が帰国する前から数も程度も低かった。日本政府は強奪や略奪がほしいままになされるのではなかいと予想して、売春宿を設置し、日本の美德を守る最前線として有志の者を配置したが、アメリカ人たちはそのようなことを働かず、目にするものに嫌悪感を抱くというよりもむしろ魅了された。刀を没収したことを除いて、勝利者たちは女性も含めて得たもののほとんどに対価を支払った⁵³。彼らは金、たばこ、ナイロン製品で支払ったが、態

⁵⁰ Gerhard Krebs, "Operation Super Sunrise? US-Japanese Peace Feelers in Switzerland, 1945," *The Journal of Military History*, 69 (2005), pp. 1081-1120 を参照。

⁵¹ Barton J. Bernstein, "Roosevelt, Truman, and the Atomic Bomb: A Reinterpretation," *Political Science Quarterly*, 90 (1975), 23-89; and "Truman and the A-Bomb: Targeting Noncombatants, Using the Bomb, and Defending the Decision," *The Journal of Military History*, 62 (1998), pp. 547-570.

⁵² Even John Dower, *Embracing Defeat: Japan in the Wake of World War II* (New York: Norton, 1999)さえ、特に基準が厳しかったわけではないが、勝利者は日本人を「はるかに凌ぐ規律正しさ」で行動したことを渋々認めている(p. 211)。

⁵³ 説明の一般的なヒントとしては、Leo Braudy, *From Chivalry to Terrorism: War and the Changing Nature of Masculinity* (New York: Knopf, 2003) を参照。Martin van Creveld, *The Culture of War* (Novato, Ca.: Presidio Press, 2008) も示唆的である。

度や行動も忘れなかった。歴史的、文化的記憶は固定されない。それらは無視することもできる。形が変わることもある。占領の性質は今も発展中の太平洋横断文化と、依然として持続されている太平洋越しの関係に、少なからず寄与した。